

コメント

討論者：池尾愛子（早稲田大学）

お茶の水女子大学ジェンダー研究所公開セミナー「日本における女性と経済学」にお招きいただき、感謝しております。残念ながら出席が叶いませんので、書面でのみ参加させていただきます。

現在、20年ぶりではありますが、「女性と経済学・経済思想の歴史」に関する国際プロジェクトに関わっており、日本女性のケースを扱っていますので、『日本における女性と経済学』には参考になる部分がたくさんあります。

1995年頃から2001年まで、女性エコノミストの辞典を作成するプロジェクトが動いて、『女性エコノミストの伝記的辞典』(A *Biographical Dictionary of Women Economists*, 2001年)に結実しました。英語の「economist」には大学所属の経済学者も非教育機関の経済専門職（エコノミスト）も含まれます。山川菊栄、三瓶孝子（早稲田卒、経済史）、谷野せつ（日本女子大卒）の項目が入りました。どういう女性を含めるか議論していた時、「研究貢献があること」、「本を2冊は出版していること」が条件として挙がってきたことも添えておきます。そして、ヨーロッパ、北米、ロシア、日本の女性エコノミスト達の短い伝記が収録されました。

20年前、お茶大百年史で「松平友子」は見つけていました。しかし、当時所属していた大学の図書館に彼女の本が1冊もありませんでした。現在の所属先の図書館には1冊だけあり、「これは素晴らしい」と感じましたので、2016年3月にお茶大図書館に計4日通い、いつになく心地よく仕事を進めました。

現在のプロジェクトでは、以前のプロジェクトを参照して、「少なくとも1770年代以降の女性の経済学・経済思想に注目する」、「1950年以前に生まれた女性を対象とする」ことになっています。今回はさらに、インド、アラブの女性の経済学・経済思想が加わりそうですが、「中国女性の経済思想」の章は将来の版に持ち越されそうです（上記辞典の改訂版には中国人女性経済学者の項目が入りそうです）。それゆえハンドブック・プロジェクトでは、同じ登場人物たちでも描き方は辞典プロジェクトとは幾分か異なります。近世の女性（只野真葛, 1763-1825 など）、（江戸期と）明治期の家政学（household management）、良妻賢母（good wife/wise mother）が入り、お茶の水女子大学と慶應義塾大学に注目しています。

女性エコノミストの貢献に注目する国際比較の観点からコメントさせていただきたく存じます。

1. 日本における女性と経済学を考察する際には、家政学と儒学の影響を視野に入れるべきでした。

昨2016年8月に東京で開催された国際二宮尊徳思想学会で、「家政学・家事経済学と二宮尊徳の教義」と題して報告しまして、大藤修会員から重要な示唆を得ました（小山1991; 大藤2001, 2015）。

家政学は江戸時代、男性による男性向けの学問であった。

家政学は明治時代になって、男性が外で働けるように、女性向けに再構成された。

明治時代以降、家政学は女性に託されました。そのため、女性の社会的地位が幾らか向上したのです。

常見育男の『家政学成立史』（1971: 123）によれば、明治初期には、貝原益軒の『家道訓』（1711）の縮刷本が広く女性向け家政学の教科書として援用されました。1879（明治12）年版の『家道訓』上下の内容（目次）

を見る限り、益軒の『家道訓』だけではなく、『楽訓』(1710)や『養生訓』(1713)なども盛り込まれたようです。

常見(1971:123)では、『家道訓』での家を治めるための理論的考察の特徴として5点が提示されました。うち3点を紹介します。(強調文字、下線は、引用者のもので、引用文中の誤植は訂正しました。修正にあたって、お茶の水女子大学の板井広明氏からのご指摘に感謝します。)

①家庭経営には四つの原則がある。

すなわち、「家を脩(おさむ)るには四つの教えがある。一には家業を勤めて、生業をおさめる。二には儉約して、財用を足す。三には慎んで、わが身を保つ。四には恕にして、人を愛す。恕とは、わが心にて人の心を推量って、人の好むことは施し、嫌うことは施さず。およそ、家を治る人は、皆この四つを守るべし。」

②一生の生活設計をたてるべきである。

すなわち、「人に五計あり。一生の間、十歳より六十歳まで、時につけてなすべき営みがあると言える。まず、十歳の頃には、ひとえに父母の養いによって成立ち、父母の教えに背くべからず。是を生計という。二十歳はもとより、身を慎しみ・学問し・芸を習い・家業をつとめて身を立てる計をなすべし。これを身計という。二十歳より四十歳に至りては、家事を営みて家を保つ計をなすべし。これを家計という。五十歳にしては、子孫のために図る。子孫は年わかき世事に馴れない。父まずそのために計をなすべし。これを老計という。六十より以上は、わが死後の事を営み図るべし。死後のことを早く営まなければ、死に臨んで口惜しけれど甲斐なし。この五計は、宋の人朱新仲の語なり。これ世の常の人も及ぶべき計なり。もし、この年に応じて計をなさずんば怠れるなり。力なしというべし。」

③ 家の経営には人の管理と物の管理がある。

すなわち「家を治むるは国を治むるに同じ。財を用い人を用うる。この二事を慎むべし。財を用ると人を用るとの二つは家を治める際の要なり。」

江戸時代初期の貝原益軒は「土農工商すべてに家がある」として「家道」を説いていました。「家」の統治が「国」の統治につながります。個人の観念はありません。家計の行動に注目するミクロ経済学と、集計量を扱い経済全体を分析するマクロ経済学の日本的基礎といえます。日本の経済学で用いられる「家計」は、貝原益軒の『家道訓』から家政学を経由して導入されたことは間違いありません。そして日本の経済学では、海外の経済学におけるより、家計行動のウェイトが高くなってきたようです。これは家政学や家事経済学の経済学への貢献です。

東京家政学院創設者の大江スミは『応用家事精義』(1916)において、家政を「家を齊(ととの)えることを研究する学問」と定義し、家政の良否が国家の盛衰興亡にかかわると位置づけ、家政学を「治国の学」と意味づけました(復刻版1978:188-9)。まさに貝原益軒を受け継ぎました。

それから、儒学の影響が中国社会での女性の地位の低さにつながっていたとのH.T. Zurndorferの論文「中国学術界における女性」(2014)があります。儒学文献では女性が無視されていました。近世から現代の日本についても、女性の社会的地位の低さについて、儒学の影響は否定できないと思います。家政学の歴史、特に江戸時代と明治時代での断絶に注目すれば、はっきりと見えてきます。松田道雄が「貝原益軒の儒学」(1969)で示したように、貝原益軒は儒学を含め中国文献をよく読んでいました。

2. 松平友子(1894 - 1969)の研究貢献を入れるべきでした。

松平友子が、1919 - 1922年に東京帝国大学経済学部特別学生として河津暹(1875 - 1943)と山崎覚次郎(1868 - 1945)の指導の下で学んだことを「発見」されたのは、本書の執筆者たちの大きな貢献です。これを参考にして、松平の最初の著書『家事経済学：家庭生活の経済的研究』全2巻(1925a)の日本語での参考文献を探しあてる作業に挑戦できました。その結果、副産物を含めて、次のようなことがわかりました(池尾2016d 日本経済思想史学会東京例会報告)。

(1) 河津暹の『経済学』(1924)が大いに参考にされた。福田徳三の『経済学教科書』(1911)が部分的に参考にされた。(これらは当時非常によく読まれた教科書だったようです。)

(2) 河津暹の『経済学』(1924)は、福田徳三の『経済学研究』(1920)を参考にした。福田(1920)は主にドイツ歴史学派経済学の研究書であり、河津(1924)は、ドイツ的・西欧的部分を削り、福田の経済学研究を「日本化」した、あるいは「脱ドイツ化」・「脱西欧化」したといえる。

松平友子は河津と福田の本は読みこなしました(当日配布のみの資料に今少し詳しい説明を載せます)。それゆえ、松平の貢献に注目すべきであり、それは家政学研究に基づくものになります。『家事経済学』上巻では総論、収入論、支出論を論じました。下巻では会計、貯蓄を論じ、家事には家業を含め、財産管理、家計から見た金融制度を展開しました。

『家事経済学』上巻(1925a: 649-650)から、近世の節約思想と近代の合理的思考が結びつく箇所を現代語に近づけて引用しておきましょう。

第一、節約 消費をなるべく少なくして、かつ、私達の欲望をなるべく多く充足すること、即ち私達の持つ財貨を最も有効に利用すること、これが即ち節約であって財貨の使用上最も重要な知識である。

節約は浪費の反対語であって最小の浪費により最大の満足を得ようとする経済主義の原則の一応用に他ならない。従って節約について注意すべきは、財貨そのものの節約の他に労力及び時間の節約がある。

例えば食物の調理に付ては

(一)、出来るだけ少ない費用で私達の保健に適する献立を作る必要があると共に、又、あるいは

(二)、比較的短時間を以て軽便なる方法で栄養に適し、消化し易く、かつ家族の嗜好に適せる調理法を研究し、あるいは

(三)、調理器具及び台所の改善を施し、

かくして時間の空費と労力の無駄を省き、それによって主婦の能率を上げることが肝要である。

つづいて、『家事経済学』上巻(1925a: 653-654)から、合理的思考と科学的知識の採用と進歩を語る箇所を現代語に近づけて引用しましょう。

婦人と消費の進歩、経済生活の合理化には密接な関係があり、その実行は家庭にとって社会にとっても大きな資源となるであろう。生産は過去一世紀間に近代科学の知識と技術とを採用して大進歩を遂げたが、消費は幼稚な旧態を持続している。ここにおいて婦人たるもの努力奮闘して大に近代科学の知識を採用し、生活の組織的研究を行うと共に、これを基礎とする応用的技術を習得し、それによって真に生活を向上発

展させる責任がある。

このように松平友子は技術進歩を消費生活に取り入れて、生活の向上を図ることを唱えました。家計簿を使って家計行動を統計的に分析したのは、日本の家政学や計量経済学の貢献になります。

また彼女は生涯を通して大変な読書家で、彼女の著した書物にはいつも研究の成果、新たな読書からの知見と考察、書かれた時代の情況の3つが反映されています。最初の著作は1925年の『家事経済学』全2巻ですが、同年に彼女は『家事経済読本』と『家事経済要綱』（外国の話を除く）も出版しました。さらに、群書類従や二宮尊徳も読んで、その話を後の著書や教科書（松平1949）に盛り込みました。

3. 副題の「1910年代の黎明期」という表現は不適切です。

明治期に活躍した天野為之（1861－1938）がいました。天野の『経済原論』（1886）は明治期の経済学書のベストセラーとなって3万部を売りました。彼の『経済学綱要』（1902）は高等商業学校の教科書として採用され、嵯鏡訳中文版『理財学』（1902）が上海の文明編訳印書局から発行され、やはりよく売れました。天野の『経済原論』・『経済学綱要』では、貯蓄・投資のマクロ・バランスが考察されました。天野は二宮尊徳の教義（『報徳記』『二宮翁夜話』）を読んで、剰余（貯蓄）が新田開発（による「経済成長」）につながることを認識しました。（浅川・西田1950; 池尾2012、2013、2015、2016a 参照）

（天野の書籍の多くは、国会図書館近代デジタルコレクションで閲覧可能になっています。）

上記2. で示したように、経済学や経済原論では、1920年代になっても、日本人の文献を参考文献リストに入れる習慣が確立されていなかったようで、天野の貢献が忘れられたといえるでしょう。大学院生たちに天野の話をする、日本語での経済学の議論に彼の影響が残っていることが感じられ、彼の先駆性に気づくようです。

ちなみに、金融・貨幣経済学分野では、1910年代に、日本人の貢献を含めて、他人の貢献と自分の貢献を区別して論文を書くスタイルが確立されていました（池尾2006第2章、参照）。

4. 松平友子のこと、大江スミにとって大切な人だった安井てつのこと、大変参考になりました。

常見育男の『家政学成立史』（1971）に登場する森本厚吉について詳細を知ることができました。竹中恵美子さんや村松安子さんのお仕事やお話、参考になります。

*2月22日のIGSセミナー用の配布資料に名前は載せたものの、準備不足で紹介できなかった女性を追加させていただきます。

5. 江戸時代の只野真葛（1763-1825）は、注目すべき論考『独考』（1817）を書きました。

只野真葛（あや子）は1763（宝暦13）年、仙台藩伊達家の江戸屋敷に仕えた医師、工藤平助（1734-1800）の長女として江戸で生まれ、そのまま江戸で育ちました。母も医師の娘でした。工藤家には『解体新書』など西洋医学書があり、平助は医学校を開き100冊の医学書を書きました。工藤家には様々な情報通（長崎のオランダ通詞、松前からの訪問者を含む）が集い、平助は青木昆陽（1698-1769）から教え（経済）を受けました。そして平助は諸外国と貿易する提言（1783年完成）を幕府に提出しました（蝦夷地調査は実施され

たものの、将軍交代等があり、世には知られませんでした)。真葛は父の書齋の書籍を読んだり父と客人たちの会話を聞いたりして育ちました。儒学は男性の学問です。弟の源四郎が真葛のために『論語』の通釈をし、儒教倫理を説いてくれたようです(鈴木 1994)。太宰春台(1680-1747)が『経済録』(1729)等で国家経営、経世済民、国内資源の利用(土地・人材・技能活用)を唱えたことも知られていたようです(Gramlich-Oka 2006)。真葛は1797年に仙台藩士の只野伊賀の後妻となって仙台に引っ越し、子育て、思索、執筆(『むかしばなし』や『独考』など)に励みました。伊賀は蔵書家の神職藤塚式部や、臨済宗住職の古梁紹岷(南山禅師)と親交がありました。

真葛は『独考』(1817)に、「文字を横なす国」ロシアやオランダなど西洋諸国に関する知識を盛り込みました。経済的言説の中で最も注目されるのは、「交易して国をとませんことを願となん」とする開国論です。日本では産していない物や、外国人が時計を所持して時刻を忘れないことに注目しています。日本(長崎)からの輸出品として、金、銀、銅、鉄、薬、その他があげられ、国内では砂糖の価格が塩の価格を上回るが、外国では逆の場合があることを指摘しています。金のゆくえ(流れ)や、物の値段のただようこと、大火の後に物の値段が騰貴する事情も書かれています。公儀の御城普請に際して、入札が行われて格別低い価格を提出した者に札落しになるという叙述があるほか、金銀・金銭を巡る争いが生じていることが繰返し述べられ、公共事業や商売で競争が激しくなっているとの論評もあります。人間は本性的に勝負ごと(競争)を好み、慾に動かされるとの叙述も数回出てきます。日本の老中・役人が「君子」として商いに乗り出せば「利正しく」、そして交易すれば国を富ませられるというわけです。

「聖の道」(儒学経典)について、真葛は誠については評価するものの、女性蔑視が貫かれており、「全く人の作りたる一法」を唐より借りてきたもので、国情が異なる(真葛は「拍子がちがう」と表現します)日本に用いてはいけない、と忠告しました。彼女の「仏の教も聖の道も、共に人の作りたる一の法にして、おのづからなるものならず」の一説は研究者によく引用されています。一方で真葛は、国学者本居宣長の『古事記伝』(1798)を評価し、源氏物語や伊勢物語、つれづれ草に言及しました。

真葛の『独考』の出版は20世紀になってからですが、真葛と文通した滝沢馬琴によって批判的論考『独考論』(1820)が書かれ、その写本を通して知られてゆきました。馬琴は『独考』から十分に引用した上で、儒学文献からの引用を交えて厳しく批判しました。馬琴の引用は、真葛が海禁並びに「士農工商」の身分制度に反対したことを正しく伝えました。馬琴は真葛を「男のように考える女」と評しました。1994年に鈴木よね子校訂の『只野真葛集』が出版され、それ以前の研究文献が紹介されました。2006年にベティーナ・グラムリッヒ-岡の『只野真葛論—男のように考える女—』(英語)、2008年に関民子の『只野真葛』が出版されています。真葛は馬琴研究者からも注目されています。

参考文献リスト (関連する文献を含む)

- 天野為之 (1886a) 『経済原論』 東京: 富山房. 複製版、早稲田大学、1961年.
- 天野為之 (1886b) 『商政標準』 富山房.
- 天野為之 (1890) 『経済学研究法』 博文館.
- 天野為之 (1901) 『勤儉貯蓄新論』 (講義) 寶永館書店 東洋経済新報社.
- 天野為之 (1902a) 『経済学綱要』 東洋経済新報社.

- 天野為之 (1902b) 嵯鏡訳『理財学綱要』(漢文) 上海: 文明編訳印書局.
- 天野為之 (1910) 『経済策論』 実業之日本社.
- 天野為之謹輯・西村茂樹校定 [1893] (1894) 『小学修身経: 尋常科生徒用』 富山房.
- 天野為之謹輯・西村茂樹校定 (1894) 『小学修身経: 高等科生徒用』 富山房.
- 天野為之編著 (1913) 『実業新読本』(全5巻) 訂正再版、富山房. 初版、明治図書、1911年.
- 浅川榮次郎・西田長壽 (1950) 『天野為之』 実業之日本社.
- Ikeo, Aiko (2000) Takako (Koko) Sanpei (三瓶孝子), 1903 – 1978, Setsu Tanino (谷野せつ), b1903 [1903 – 1999], and Kikue Yamakawa (山川菊栄), 1890 – 1980. In Dimand et al. (2000).
- 池尾愛子 (2006) 『日本の経済学——20世紀における国際化の歴史』 名古屋大学出版会.
- 池尾愛子 (2012) 「天野為之と『マクロ経済学』の形成—経済学史上の再評価」『早稲田商学』(431): 645-683.
- 池尾愛子 (2013) 「天野為之と二宮尊徳の教義: 推譲、仕法、そして経済教育」『報徳学』(10): 45 – 60.
- 池尾愛子 (2015) 「天野為之と日本の近代化: 明治期の経済学者、ジャーナリスト、教育者」『早稲田商学』441/442:313 – 329.
- 池尾愛子 (2016a) 「天野為之編『実業新読本』を読む—発明、国際貿易、福澤諭吉—」『早稲田商学』445: 251 – 276.
- Ikeo, A. (2016b) Japanese Women's Economics (日本女性の経済学). Paper presented at the annual conference of the History of Economics, Duke University, USA, June 17 – 20.
- 池尾愛子 (2016c) 「家政学・家事経済学と二宮尊徳の教義」国際二宮尊徳思想学会、東京、8月24-25日.
- 池尾愛子 (2016d) 「日本女性の経済学と経済思想」日本経済思想史学会東京例会、10月8日.
- 伊藤秋子 (1982) 「改題」。松平 (1925a) の復刻版に収録.
- 石田梅岩他『石門心学』柴田実編集、岩波書店.
- 大江スミ (1916) 『応用家事精義』宝文館. 復刻版、柏書房、2010年.
- 大江スミ (1918-20) 『応用家事教科書』2巻、改訂版、宝文館. 初版1917年. 復刻版、第一書房、1982年.
- 大藤修 (2001) 『近世の村と生活文化: 村落から生まれた知恵と報徳仕法』吉川弘文館.
- 大藤修 (2015) 『二宮尊徳』吉川弘文館.
- 大浜徹也 (1978) 『大江スミ先生』東京家政学院光塩会編、東京家政学院光塩会.
- 貝原益軒 (1710) 『楽訓』. 貝原 (1969) に収録.
- 貝原益軒 (1711) 『家道訓』. 貝原 (1969) に収録.
- 貝原益軒 (1713) 『養生訓』. 貝原 (1969) に収録.
- 貝原益軒 (1969) 『貝原益軒』(日本の名著14、松田道雄編)、中央公論社.
- 河津暹 (1924) 『経済学』清水書店.
- 栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵編 (2016) 『日本における女性と経済学—1910年代の黎明期から現代まで』北海道大学出版会.
- 小山静子 (1991) 『良妻賢母という規範』勁草書房.
- 須崎文代 (2010) 「大江スミの家政論の展開と住居観」. 大江 (1916) 復刻版所収.
- 鈴木よね子 (1994) 「改題」. 只野 (1994) 所収.
- 関民子 (2008) 『只野真葛』吉川弘文館.
- 滝沢 (曲亭) 馬琴 (1820) 「独考論」. 只野 (1994) に収録.
- 太宰春台 (1729) 『経済録』. 太宰 (1935) に収録.
- 太宰春台 (1935) 『太宰春台集』(横川四郎編輯、中村孝也解題) 誠文堂新光社.
- 只野真葛 (1812) 『むかしばなし』. 只野 (1994) に収録.

- 只野真葛 (1817) 『独考』. 只野 (1994) に収録.
- 只野真葛 (1994) 『只野真葛集』 (鈴木よね子校訂)、国書刊行会.
- 常見育男 (1971) 『家政学成立史』 光生館.
- 二宮尊徳 (1970) 『二宮尊徳』 (児玉幸多編集) 中央公論社.
- 福住正兄 (2012) 『二宮翁夜話』 中央公論社. 静岡: 報徳図書館、1893年. 二宮 (1970) に収録.
- 福田徳三 (1911) 『経済学教科書』 同文館.
- 福田徳三 (1920) 『経済学研究』 全2巻、同文館.
- 松田道雄 (1969) 「貝原益軒の儒学」 (『日本の名著 14 貝原益軒』) 中央公論社.
- 松平友子 (1925a) 『家事経済学：家庭生活の経済的研究』 上下、文書堂. 復刻版、第一書房、1982年.
- 松平友子 (1925b) 『家事経済読本』 文書堂.
- 松平友子 (1925c) 『家事経済要綱』 文書堂.
- 松平友子 (1949) 『一般家庭 (1) 家事経理編』 中等学校教科書株式会社.
- Dimand, Robert W., Mary Ann Dimand, Evelyn L. Forget eds (2000) *A Biographical Dictionary of Women Economists* (女性エコノミストの伝記的辞典), Edward Elgar. Paperback, 2004.
- Gramlich-Oka, Bettina (2006) *Thinking Like a Man: Tadano Makuzu (1763-1825)*. Brill's Japanese Studies Library. 上野未央訳『只野真葛論—男のように考える女—』岩田書院、2013年.
- Madden, Kirsten, Michele Pujol, Janet Seiz eds (2004) *A Bibliography of Female Economic Thought up to 1940* (1940年までの女性経済思想文献集), Routledge. Paperback, 2012.
- Zurndorfer H.T. (2014), Women in Chinese Learned Culture: Complexities, Exclusivities and Connecting Narratives, *Gender and History* 26(1): 23-35.